國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

# 第3回国際比較神話学会議



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/00001782 |

# 第 3 回国際比較神話学会議

2009 年 5 月 23 日、24 日の二日間にわたり、國學院大學学術メディアセンターにおいて国際比較神話学会（International Association for Comparative Mythology）主催、科学研究費補助金による「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者：星野英紀大正大学教授）共催による第 3 回国際比較神話学会議が開催された。

国際比較神話学会は、2006 年 5 月に中国、北京大学において、ハーバード大学と北京大学が共同で開催した比較神話学国際会議（International Conference on Comparative Mythology, Harvard & Peking University）の際に、ハーバード大学の Michael Witzel 教授を会長として、学会としてスタートした。その後、2007 年にはイギリス、エジンバラ大学にて第 1 回が、2008 年にはオランダ、ラーフェンスタインで第 2 回の会議が開催された。そして第 3 回の会議開催にあたって、Witzel 会長より、学会のアジア地域ディレクターである松村一男和光大学教授と北京大学での会議に参加していた本学日本文化研究所の平藤に打診があり、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所とハーバード大学からの後援を受けて、本学にて開催するはこびとなった。

日本には神話学の学会は未だ存在しないが、今回の会議には国内外から 70 名を越す発表者、来聴者があり、神話学への関心の高まりをうかがい知ることができた。また、研究発表以外にも、一日目には日本文化研究所の「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトが運営している Encyclopedia of Shinto（EOS）について星野靖二助教が説明を行い、さらに星野光樹氏、越智三和氏の協力を得て、祭式教室にて模擬祭式を行い、雅楽も奏していただいた。2 日目には、加瀬直弥講師の案内で伝統文化リサーチセンターの見学会も行った。はじめて神道の儀礼や雅楽の楽器を見たという参加者も多く、それぞれ終了後には活発な質疑応答も行われた。帰国後に運営する HP やメーリングリストで EOS や祭式の紹介をする参加者もおり、神道文化の国際発信を行う貴重な機会となった。

では次に会議の概要を述べる。1 日目の午前には、常磐松ホールにて 3 名の講演者による基調講演会を行った。最初に主催者を代表して松村一男氏より、開会の挨拶があり、引き続き井上順孝國學院大學教授が、歓迎の挨拶及び共催している「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」プロジェクトの紹介を行った。

最初の講演は、国際比較神話学会の名誉会員でもある吉田敦彦学習院大学名誉教授による「大国主神と印欧語族の三機能システム」と題するものであった。長年日本の比較神話学を牽引してきた吉田氏の業績の一つである、日本神話に印欧語族と共通する世界観が反映しているとする指摘を、さらに深めた内容であった。

二人目は国際比較神話学会の会長である Michael Witzel 教授による “Central Asian and Japanese Mythology”（「中央アジア神話と日本神話」）と題する講演である。ヴィッツェル教授はインド学の権威であり、「リグ・

ヴェーダ」の翻訳といった業績がある。今回は、そうした研究の蓄積をもとに、ヴェーダ神話と日本神話の関係について論じた。

三人目の講演者である千家和比古出雲大社権宮司は、「日本神話にみる基層心意:“出雲”の姿相・位相を踏まえて」と題する講演を行い、出雲大社の儀礼、出雲神話にあらわれた日本人の相対性、永遠性を希求する心について具体的な事例を挙げながら論じた。

なお Witzel 教授の講演の日本語訳（松村氏訳）、千家権宮司の講演録は、『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所　年報第 2 号』に掲載されている。

午後は場所を学術メディアセンター 5 階の会議室 06 に移して研究発表が行われた。研究発表は 4 部にわかれ、第 1 部は平藤が司会を行い、Klaus Antoni 氏、（ドイツ、テュービンゲン大学）、Quiros Ignacio 氏（フランス、高等研究院、立教大学）、Ioannis Gaitanidis 氏（イギリス、リーズ大学、駒澤大学）が日本神話をテーマにする研究発表を行った。第 2 部は、ロシア、Academy of Sciences の Yuri Berezkin 氏司会のもと、荻原真子氏（千葉大学）、後藤明氏（南山大学）がそれぞれシベリア、ポリネシアの神話について発表した。

2 日目に行われた第 3 部では、松村一男氏の司会で、丸山顯徳氏（花園大学）、森雅子氏（中央大学）、Yuri Berezkin 氏（ロシ　ア、Academy of Sciences）、Wim van Binsbergen 氏（オランダ、ライデン大学）が、比較神話学的研究の成果を発表した。

第 4 部は、井上順孝氏の司会で「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」プロジェクトによる研究、および関連の研究発表が行われた。発表者は、Steve Farmer 氏（アメリカ）、土屋博氏（北海道大学）、平藤喜久子（國學院大學）、月本昭男氏（立教大学）、Thorsten Pattberg 氏（中国、北京大学）であった。

発表者は、基調講演もあわせ 18 名であった。発表では、日本をはじめ古代オリエント、中国、ポリネシア、シベリアの神話が取りあげられ、また広域な範囲の神話を対象とする

比較研究もあった。古代の神話から現代日本の神話をめぐる問題や脳生理学、コンピューターサイエンスからのアプローチも取りあげられ、方法論的にも広がりのあるものであった。

これまでの比較神話学では、20世紀前半に流行した歴史民族学に顕著であるように、言語や物質文化とともに神話の比較をおこない、文化間の接触、影響を明らかにし、文化、神話の「起源」を求める研究が主流であった。そうした目的を持つなら、これからの神話学は近年の進化生物学、脳科学、人類アフリカ起源説のような遺伝子レベルでの人類史、コンピューターを利用したデータ解析の手法などの成果にも目を配る必要があるだろう。

今回発表、講演を行ったなかでとくに Witzel 氏、Farmer 氏、Berezkin 氏、Binsbergen 氏は、まさにこうした近年の研究を取り入れた神話学の代表的な研究者である。これまでも松村一男氏によって日本でも彼らの研究紹介がなされてきたが、今回の会議により、直接研究成果を聴き、目にし、討議できたことは、日本の神話学にとっても大いに刺激になったと考える。

また、「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」プロジェクトと共催し、日本における宗教文化教育の状況についても議論することができた。教育における神話の取扱いについては、日本における神話教育のように、それぞれの地域固有の問題もあるが、グローバル化時代に求められる神話の知識もあるだろう。そうしたことについて国際的に議論を行う必要もあると思われる。今回の会議がその一歩となれば幸いである。

最後に、第3回国際比較神話学会議の開催にあたっては、國學院大學から学会開催補助をいただいた。また日本文化研究所に後援していただき、多くのスタッフの方々に通訳をはじめとする手助けをしていただいた。そのおかげで大変円滑な会議運営ができ、国内外からの参加者に充実した研究会議を提供することができたこと、心より御礼申し上げる次第である。

（平藤喜久子）